

各関係機関の長 殿

鹿児島県病害虫防除所長

令和3年度病害虫発生予察情報について

このことについて、発生予報第11号（2月）を発表したので送付します。

鹿児島県病害虫防除所

〒899-3401

南さつま市金峰町大野 2200

☎ 099-245-1081 (代表)

099-245-1157 (直通)

099-245-1149 (FAX)

テレホンサービス

鹿児島 099-296-6430

099-296-6431

ホームページアドレス : <http://www.jpnpn.ne.jp/kagoshima>

メールアドレス : [nousou-boujo@pref.kagoshima.lg.jp](mailto:nousou-boujo@pref.kagoshima.lg.jp)



## 農薬の安全使用に努めましょう

### 農薬安全使用五つの柱

1. 使用する人の安全 使用者自身の健康管理, 安全使用
2. 作物に対する安全 適期, 適正防除で薬害防止
3. 農産物に対する安全 消費者へ安全な農産物を供給  
(農薬安全使用基準の遵守)
4. 環境に対する安全 周辺環境への影響防止  
(周辺住民等への危被害防止)  
(河川, 湖沼, 海などへの汚染防止)  
(養蚕, 養蜂などへの危被害防止)
5. 保管管理の安全 保管管理の徹底で事故防止

## 農薬ラベルを確認しましょう

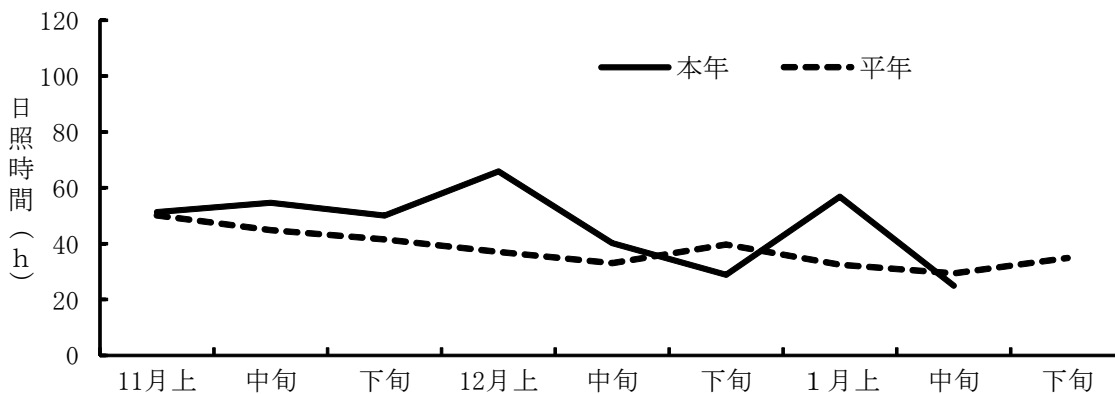
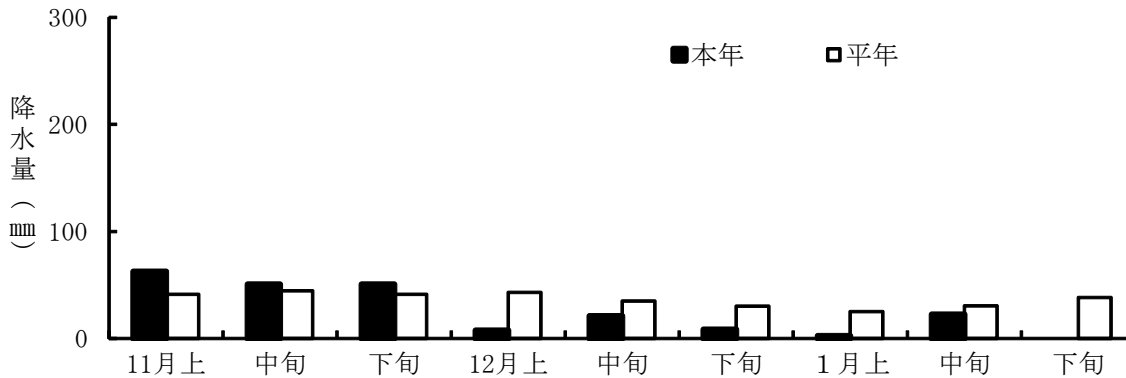
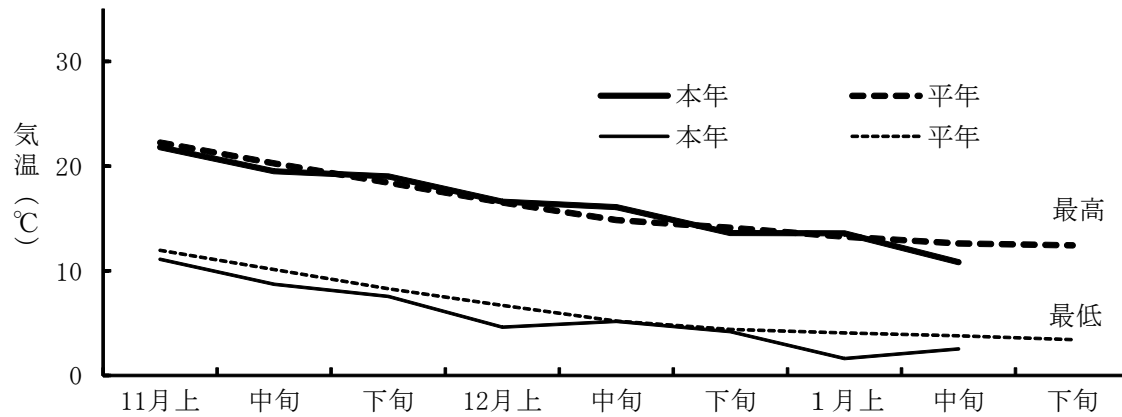
## 農薬の飛散(ドリフト)にも注意しましょう

【気象概況】

I. 向こう1か月の予報（1月29日から2月28日） 令和4年1月27日 鹿児島地方气象台 発表

要素	地域	確率（％）			概要
		低い(少ない)	平年並	高い(多い)	
気温	九州南部	40	30	30	九州南部では、気温、降水量、日照時間のいずれも平年並みの見込み。
	奄美地方	40	30	30	
降水量	九州南部	30	40	30	奄美地方では、気温は平年並み、降水量は平年より多く、日照時間は平年並みか少ない見込み。
	奄美地方	20	30	50	
日照時間	九州南部	40	30	30	
	奄美地方	40	40	20	

II. 11～1月の気象情報（鹿児島地方气象台 観測点：加世田）



### 【病害虫発生予報の概要】

作物		病害虫名	発生量	
			現況	予報
野菜	キュウリ	べと病	やや少	やや少
		退緑黄化病	多	多
	トマト	疫病	やや少	やや少
	ピーマン	斑点病	少	少
		うどんこ病	並	並
		アザミウマ類	多	多
	イチゴ	アザミウマ類	多	多
		ハダニ類	並	並
	施設野菜共通	うどんこ病	並	並
		菌核病	並	並
		コナジラミ類	やや多	やや多
	エンドウ類	うどんこ病	やや多	やや多
		ハモグリバエ類	やや少	やや少
		アザミウマ類	並	並
	キャベツ	菌核病	多	多
	バレイショ	疫病（熊毛地域）	並	並
		〃（奄美地域）	並	やや多
		軟腐病（奄美地域）	並	やや多
花き	キク	ハダニ類（県本土，施設）	並	並
		アザミウマ類（県本土，施設）	並	並

## 【 病 害 虫 発 生 予 報 】

### I. 野 菜

#### 1. キュウリ

##### (1) ベと病

###### ア 予報内容

- (ア) 発生地域 県本土
- (イ) 対象作型 促成栽培
- (ウ) 発生量 やや少

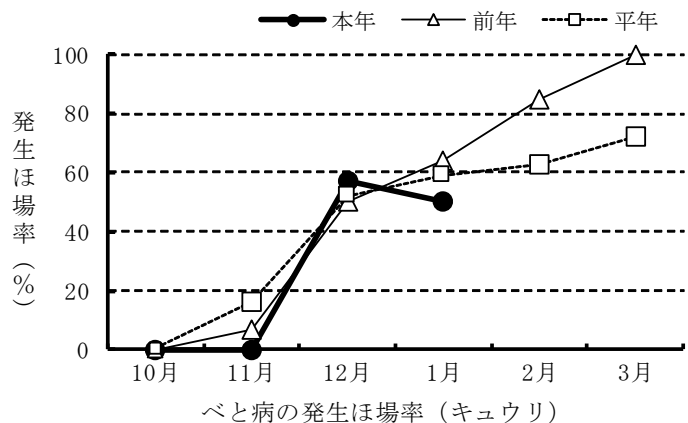
###### イ 予報の根拠

- (ア) 調査結果 発生量：やや少  
発生ほ場率50%（平年59%）

：やや低い（-）

###### ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 多湿条件下で発生しやすいので、ハウスの通風換気に努める。
- (イ) 発病葉伝染源となるので、速やかにハウス外へ持ち出して処分する。
- (ウ) 肥料切れや草勢の衰えは発生を助長するので、適正な肥培管理に努める。
- (エ) 多発すると防除が困難になるので、発生初期の防除に努める。
- (オ) 同一系統薬剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤のローテーション散布を行う。



##### (2) 退緑黄化病

###### ア 予報内容

- (ア) 発生地域 県本土
- (イ) 対象作型 促成栽培
- (ウ) 発生量 多

###### イ 予報の根拠

- (ア) 調査結果 発生量：多  
発生ほ場率57%（平年16%）

：高い（+）

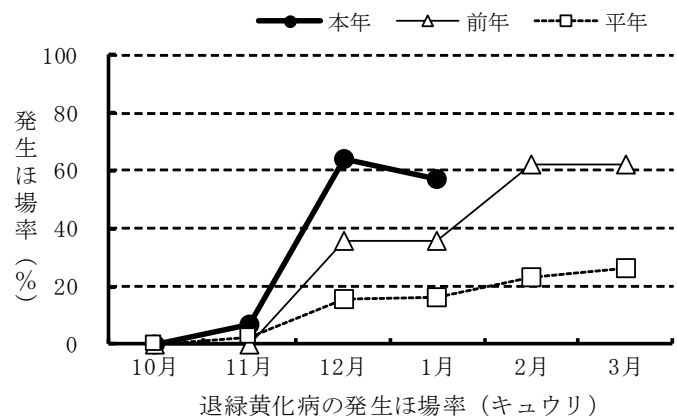
コナジラミ類の

発生ほ場率43%（平年24%）

：高い（+）

###### ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 退緑黄化病の病原ウイルスはタバココナジラミに媒介される。ハウス開口部（サイド等）等に黄色粘着トラップを設置し、タバココナジラミの早期発見，早期防除に努める。
- (イ) 発病株を認めたら速やかに除去し、ビニール袋等に入れて適正に処分する。
- (ウ) 発病後は発生拡大を防ぐため、タバココナジラミの密度を抑えるように薬剤防除を行う。
- (エ) 同一系統薬剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤のローテーション散布を行う。



## 2. トマト

### (1) 疫病

#### ア 予報内容

- (ア) 発生地域 県本土
- (イ) 対象作型 促成栽培
- (ウ) 発生量 やや少

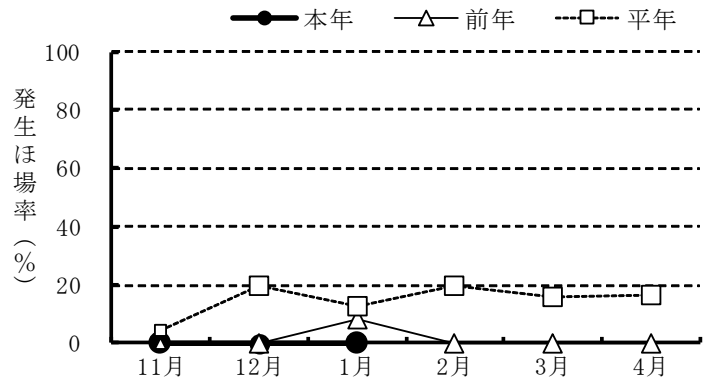
#### イ 予報の根拠

- (ア) 調査結果 発生量：やや少  
発生ほ場率0%（平年13%）

：やや低い（－）

#### ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) ハウスの通風換気を十分に行ない、過湿にならないよう努める。
- (イ) ハウス内の湿度が高く結露が多い場合は、強制的に加温を行い湿度低下を図る。
- (ウ) 発病すると急激にまん延しやすいので、発病茎葉は速やかにハウス外へ持ち出す。
- (エ) ハウスの谷部や北側等、結露し水滴の落ちやすいところで発生が多いので、早期発見し、初期防除に務める。
- (オ) 同一系統薬剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤のローテーション散布を行う。



疫病の発生ほ場率 (トマト)

## 3. ピーマン

### (1) 斑点病

#### ア 予報内容

- (ア) 発生地域 県本土
- (イ) 対象作型 促成栽培
- (ウ) 発生量 少

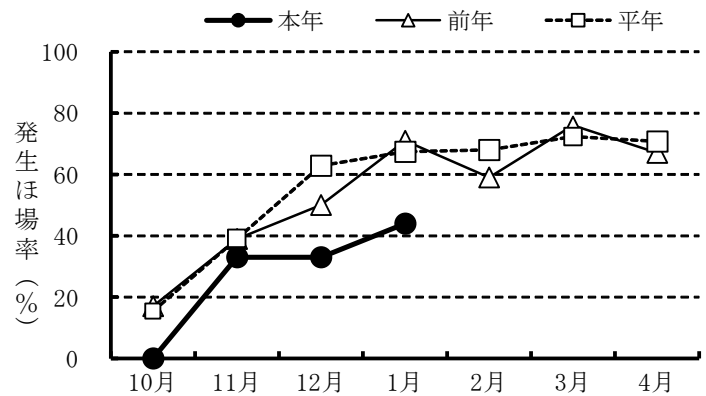
#### イ 予報の根拠

- (ア) 調査結果 発生量：少  
発生ほ場率44%（平年67%）

：少（－）

#### ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 多湿条件下で発生しやすいので、ハウス内の通風換気に努める。
- (イ) 発病葉はできるだけ持ち出して処分し、菌密度の低下を図る。
- (ウ) 成り疲れなどによる草勢低下により発生しやすいので、適正な肥培管理に努める。
- (エ) 多発すると防除が困難になるので、初期防除に努める。
- (オ) 同一系統薬剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤のローテーション散布を行う。



斑点病の発生ほ場率 (ピーマン)

(2) うどんこ病

ア 予報内容

- (ア) 発生地域 県本土
- (イ) 対象作型 促成栽培
- (ウ) 発生量 並

イ 予報の根拠

- (ア) 調査結果 発生量：並  
発生ほ場率44% (平年43%)：並

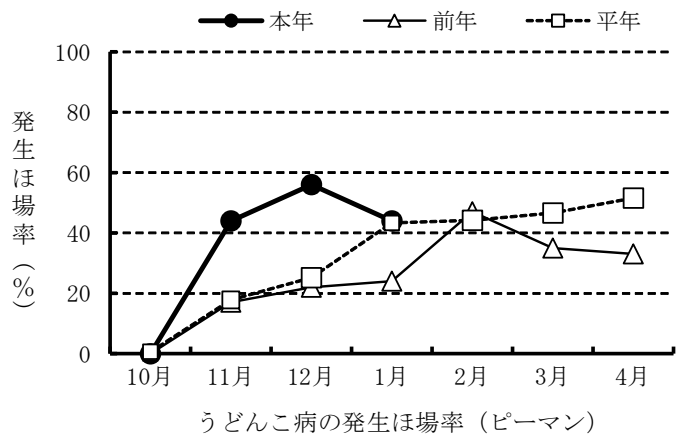
ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 成り疲れ等による草勢低下により発生しやすいので、適正な肥培管理に努める。

(イ) 発病葉は早めに除去し、施設から持ち出して処分する。

(ウ) 多発すると防除が困難になるので、初期防除に努める。

(エ) 同一系統薬剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤のローテーション散布を行う。



(3) アザミウマ類 (令和3年度技術情報第18号(12月24日付け)参照)

ア 予報内容

- (ア) 発生地域 県本土
- (イ) 対象作型 促成栽培
- (ウ) 発生量 多

イ 予報の根拠

- (ア) 調査結果 発生量：多  
発生ほ場率72% (平年35%)  
：高い (+)

ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 主な発生種はヒラズハナアザミウマである。

(イ) ハウス周辺及び内部の雑草は発生源になるので除草する。

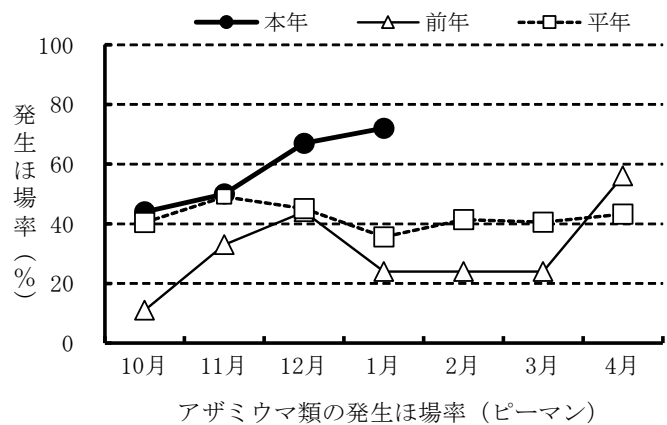
(ウ) 出入り口やサイドなどのハウス開口部から侵入することが多いので、青色粘着トラップを設置し、早期発見と早期防除に努める。

(エ) 天敵を導入しているほ場で防除を要する場合は影響の少ない薬剤を選択する。また、多発したほ場ではリセットを考慮した防除を行う。

(オ) 花や新芽の中など、薬剤のかかりにくい場所に生息するので、薬剤散布は丁寧に行う。

(カ) 薬剤によっては感受性が低下しているので、散布後は防除効果を確認する。

(キ) 同一系統薬剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤のローテーション散布に努める。



#### 4. イチゴ

##### (1) アザミウマ類

###### ア 予報内容

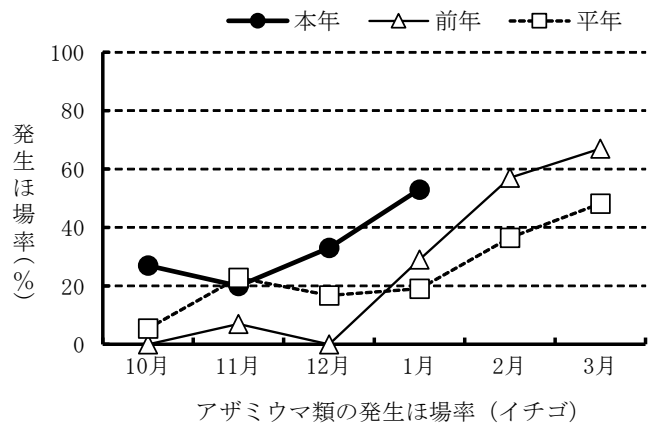
- (ア) 発生地域 県本土
- (イ) 対象作型 促成栽培
- (ウ) 発生量 多

###### イ 予報の根拠

- (ア) 調査結果 発生量：多  
発生ほ場率53%（平年19%）  
：高い（+）

###### ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 主な発生種はヒラズハナアザミウマである。
- (イ) ハウス周辺及び内部の雑草は発生源になるので除草する。
- (ウ) 出入り口やサイドなどのハウス開口部から侵入することが多いので、青色粘着トラップを設置し、早期発見と早期防除に努める。
- (エ) 本虫は花の中など薬剤のかかりにくい場所に生息するので、薬剤散布は丁寧に行う。
- (オ) カブリダニ類等の天敵を放飼しているほ場では、天敵に影響の少ない薬剤を選択する。また、多発したほ場ではリセットを考慮した防除を行う。
- (カ) 薬剤によっては感受性が低下しているので、散布後は防除効果を確認する。
- (キ) 同一系統薬剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤のローテーション散布に努める。



##### (2) ハダニ類

###### ア 予報内容

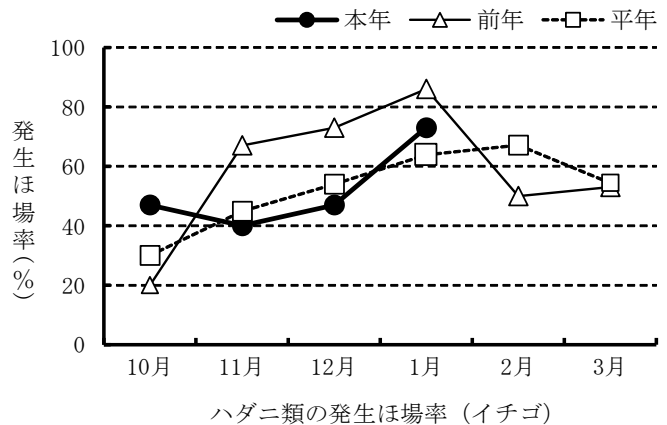
- (ア) 発生地域 県本土
- (イ) 発生量 並

###### イ 予報の根拠

- (ア) 調査結果 発生量：並  
発生ほ場率73%（平年64%）：並

###### ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 下葉や寄生葉は摘葉し、ほ場外に持ち出し処分する。
- (イ) 薬剤の防除効果をもとめるため、下葉かきを行ってから葉裏にかかるよう散布する。
- (ウ) 薬剤によっては感受性が低下しているので、散布後は防除効果を確認する。
- (エ) 同一系統薬剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤のローテーション散布に努める。
- (オ) カブリダニ等の天敵を放飼した場合は、天敵への影響を考慮した体系防除を行う。また、多発したほ場ではリセットを考慮した防除を行う。
- (カ) 薬剤によっては、ミツバチに影響があるので薬剤選定に注意する。



5. 施設野菜共通

(1) うどんこ病

ア 予報内容

- (ア) 発生地域 県本土
- (イ) 対象作物 キュウリ, メロン, ピーマン  
トマト, ミニトマト,  
イチゴ

(ウ) 発生量 並

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：並  
発生ほ場率

作物名	発生ほ場率(%)		概評
	本年	平年	
キュウリ	14	31	やや少
トマト	62	14	多
ピーマン	44	43	並
イチゴ	20	13	やや多

：発病程度は低い（－）

ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 成り疲れなど草勢が低下すると発生しやすいので、適正な肥培管理に努める。
- (イ) 発病葉は早めに除去し、施設から持ち出して処分する。
- (ウ) 多発すると防除が困難になるので、初期防除に努める。
- (エ) 同一系統薬剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤のローテーション散布を行う。

(2) 菌核病

ア 予報内容

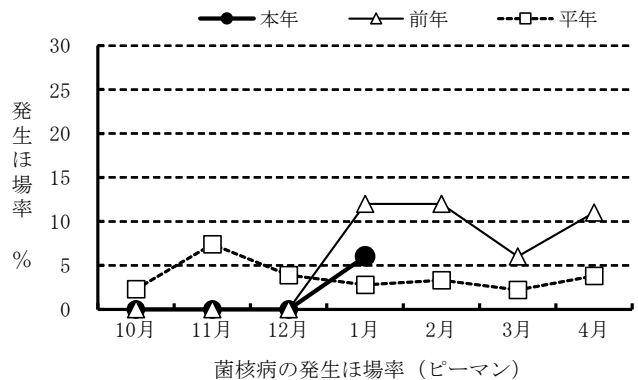
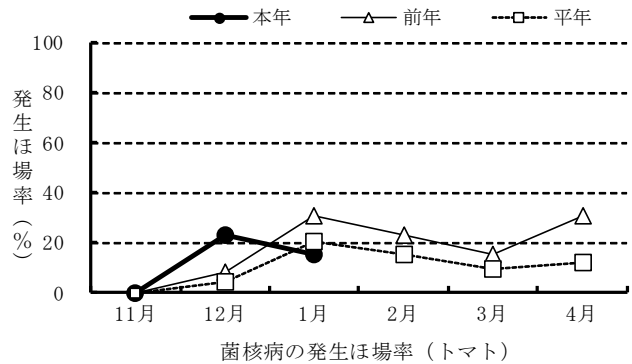
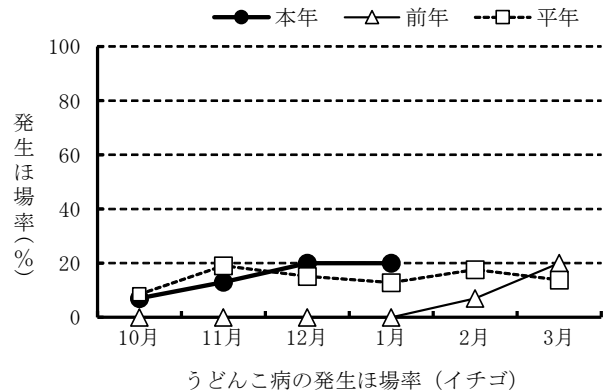
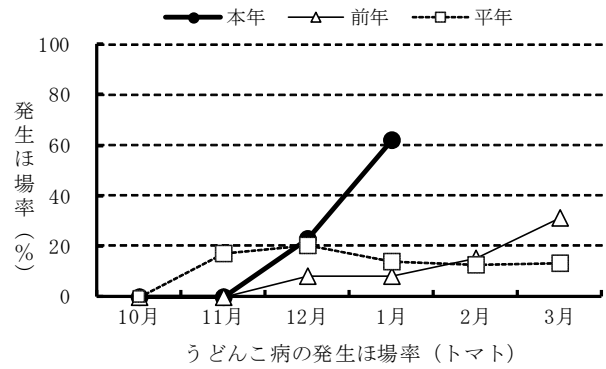
- (ア) 発生地域 県本土
- (イ) 対象作物 キュウリ, メロン,  
トマト, ミニトマト,  
ピーマン, ナス, イチゴ,  
サヤインゲン

(ウ) 発生量 並

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：並  
発生ほ場率

作物名	発生ほ場率(%)		概評
	本年	平年	
キュウリ	0	14	やや少
トマト	15	19	並
ピーマン	6	3	やや多
イチゴ	0	1	並





ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 多湿条件下で発生しやすいので、ハウス内の通風換気に努める。
- (イ) 発病に注意し予防散布に努める。
- (ウ) 病原菌は活力の衰えた花びらや枯葉、整枝後の傷口、枝分岐部付近から感染しやすいので、薬剤は対象部位へ十分かかる様に散布する。
- (エ) 発病部位から健全部へ菌糸によって被害が拡がるので、発病した花卉、枝葉、果実等は直ちに取り除き、ほ場外へ持ち出し処分する。
- (オ) 発病株は周辺株や次作の伝染源となるので、菌核を生じないうちにほ場外に持ち出し、適正に処分する。
- (カ) 適切な肥培管理により植物体が過繁茂にならないようにする。
- (キ) 収穫終了後の残渣は適正に処分する。

(3) コナジラミ類

ア 予報内容

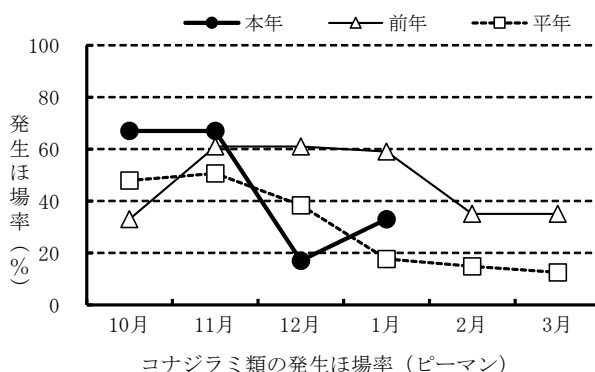
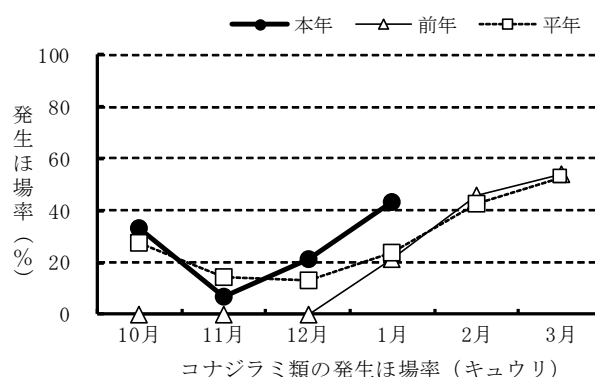
- (ア) 発生地域 県本土
- (イ) 対象作物 キュウリ、メロン、トマト  
ミニトマト、ピーマン  
イチゴ、サヤインゲン
- (ウ) 発生量 やや多

イ 予報の根拠

- (ア) 調査結果 発生量：やや多

作物名	発生ほ場率(%)		概評
	本年	平年	
キュウリ	43	24	多
トマト	0	7	やや少
ピーマン	33	17	やや多
イチゴ	27	14	やや多

注) ピーマンはタバココナジラミの調査結果



ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) キュウリやメロンにウリ類退緑黄化病，トマトやミニトマトにトマト黄化葉巻病等の病原ウイルスを媒介する。ウイルス病が発生すると被害が大きくなるので、以下の点に注意して総合的な防除対策に努める。
  - ・黄色粘着トラップを設置して早期発見・早期防除に努める。
  - ・発病株は伝染源になるので、疑わしい株も含め、見つけしだい除去し、ハウス外に持ち出して埋没処分するか、ビニール袋等に入れて処分する。
- (イ) サヤインゲンでは莢に白化症を，トマト，ミニトマトでは着色異常果を生じる恐れがあるので、早めに防除する。
- (ウ) カブリダニ等の天敵を放飼している場合は，天敵への影響を考慮した体系防除を行う。
- (エ) 同一系統薬剤の連用を避け，作用性の異なる薬剤のローテーション散布に努める。

## 防除に関する今月の留意事項

1. キュウリの植え替え作業時のミナミキイロアザミウマ及びタバココナジラミの防除について  
キュウリのミナミキイロアザミウマは黄化えそ病（MYSV）の病原ウイルスを、タバココナジラミは退緑黄化病（CCYV）の病原ウイルスをそれぞれ媒介する。

半促成作型での黄化えそ病及び退緑黄化病の発生を未然に防ぐために、植え替え作業時における害虫防除を徹底する。

- (1) 抑制作型は収穫終了までの的確な害虫防除を行う。
- (2) 収穫終了後は根を引き抜き株全体を枯死させる。
- (3) 中二重と外張りの間や谷下、暖房機の下などに生えている雑草は、ミナミキイロアザミウマ及びタバココナジラミの増殖源になるので、除草に努める。
- (4) 定植時は必ず薬剤処理を行う。

2. 国内で新たに発生が確認された害虫「トマトキバガ」について

トマト等の害虫であるトマトキバガが令和3年11月に熊本県、12月に宮崎県で確認されました。今後、県内でも発生する可能性があるので注意して下さい。

本虫に関する注意喚起資料は病害虫防除所のホームページ（[www.jppn.ne.jp/kagoshima](http://www.jppn.ne.jp/kagoshima)）にも掲載しています。発生が疑われる場合（写真1～4）は、鹿児島県病害虫防除所 Ⅱ：099-245-1157にご連絡下さい。

【写真提供：宮崎県総合農業試験場】



写真1 幼虫の食害による被害葉



写真2 幼虫の食害による被害果



写真3 トマトキバガの成虫  
昼間は葉の裏に隠れている（夜行性）



写真4 トマトキバガの幼虫  
前胸背面後縁の黒色横帯が特徴

6. エンドウ類

(1) うどんこ病

ア 予報内容

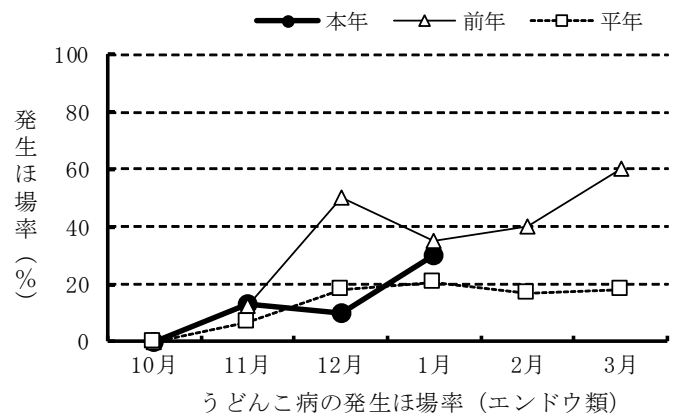
- (ア) 発生地域 県本土
- (イ) 発生量 やや多

イ 予報の根拠

- (ア) 調査結果 発生量：やや多  
発生ほ場率30%（平年21%）  
：やや高い(+)

ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 莢にごま症を発生させ、商品性の低下につながる。多発すると防除が困難になるので、定期的な防除を行う。
- (イ) 下位葉の葉裏から発生しやすいので、薬剤が十分かかるように散布する。
- (ウ) 多発ほ場では5～7日おきに連続散布し、徹底した防除を行う。
- (エ) 同一系統薬剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤とのローテーション散布を行う。



(2) ハモグリバエ類

ア 予報内容

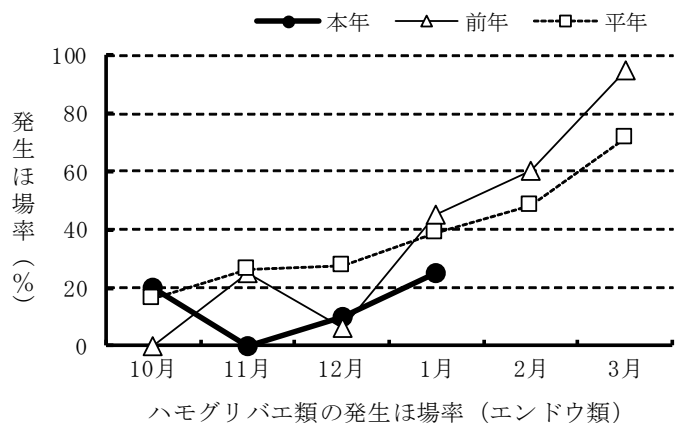
- (ア) 発生地域 県本土
- (イ) 発生量 やや少

イ 予報の根拠

- (ア) 調査結果 発生量：やや少  
発生ほ場率25%（平年39%）  
：やや低い(-)

ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) これからの時期は主に葉裏側に潜行するハモグリバエが多くなる。葉裏をよく観察し、初期防除に努める。
- (イ) 薬液は葉裏にも十分かかるよう留意し、多発ほ場では5～7日おきの連続散布で徹底した防除を行う。
- (ウ) 同一系統薬剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤のローテーション散布を行う。



(3) アザミウマ類

ア 予報内容

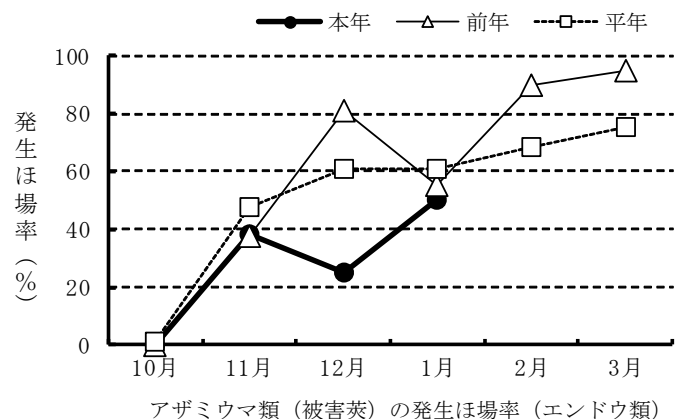
- (ア) 発生地域 県本土
- (イ) 発生量 並

イ 予報の根拠

- (ア) 調査結果 発生量：並  
発生ほ場率50%（平年61%）：並

ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) アザミウマ類は若莢に産卵し、「白ぶくれ莢」となるので、若莢の被害や青色粘着トラップへの誘殺から発生状況を把握し、早期防除に努める。
- (イ) 薬剤のかかりにくい花卉の奥や若莢に寄生するので、丁寧な薬剤散布に努める。
- (ウ) 同一系統薬剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤のローテーション散布を行う。



7. キャベツ

(1) 菌核病

ア 予報内容

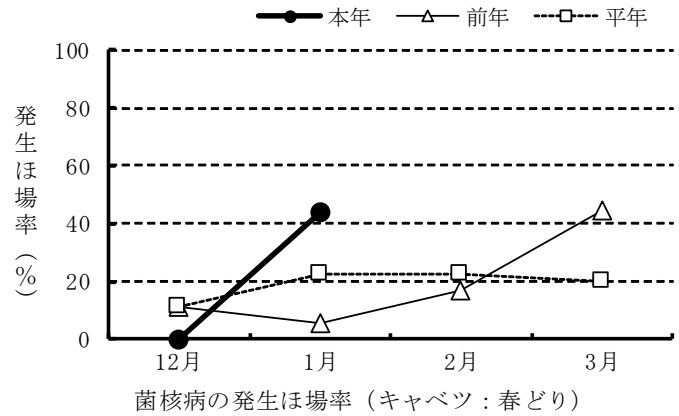
- (ア) 発生地域 県本土
- (イ) 発生量 多

イ 予報の根拠

- (ア) 調査結果 発生量：多  
発生ほ場率44%（平年23%）  
：高い（+）

ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 多湿条件で発生しやすいので、天候に注意し、予防散布に努める。
- (イ) 病原菌は地際部から感染しやすいので、薬剤は株元へ十分かかるように散布する。
- (ウ) 発病部位から健全部へ菌糸によって被害が広がるので、発病葉は見つけ次第取り除く。
- (エ) 発病株は周辺株や次作の伝染源となるので、菌核を生じないうちにほ場外に持ち出し処分する。
- (オ) 収穫終了後の残渣は適正に処分する。特に発病残渣をほ場に残さない。



8. バレイショ

(1) 疫病

ア 予報内容

- (ア) 発生地域 熊毛地域, 奄美地域
- (イ) 発生量 熊毛地域：並  
奄美地域：やや多

イ 予報の根拠

<熊毛地域>

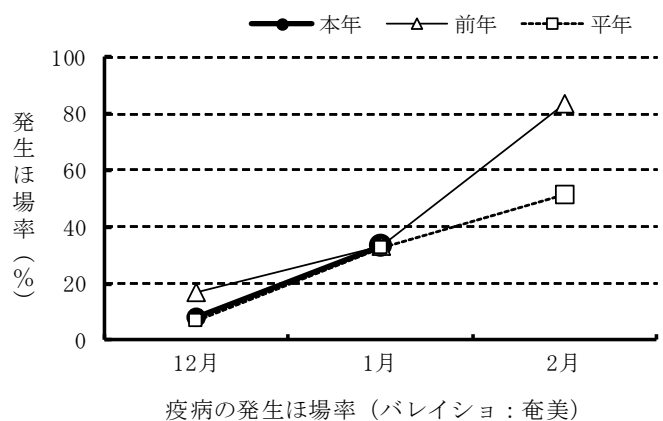
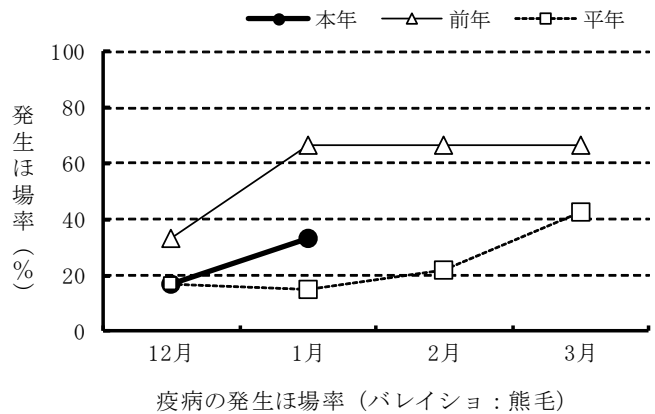
- (ア) 調査結果 発生量：並  
発生ほ場率33%（平年15%）：やや高い（+）  
発生程度は低い（-）

<奄美地域>

- (ア) 調査結果 発生量：並  
発生ほ場率33%（平年33%）：並  
強風による茎葉の折損が多い（+）
- (イ) 気象予報  
降水量：多い（+）

ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 降雨が数日続いた場合や、土壌水分が高い場合に発生しやすく、発病後は急速に病勢が進展するので、防除は予防散布に重点をおき、適期を逃さないように注意する。
- (イ) ほ場の見回りを行い、発生が認められたら直ちに防除を行う。その後は、進展状況に応じて7～10日後に追加散布を行う。
- (ウ) 同一系統薬剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤のローテーション散布を行う。
- (エ) 収穫が遅れると被害拡大につながるため、適期収穫を行う。



(オ) 発病株は次年度の伝染源となるため、ほ場外に持ち出し適正に処分する。

(カ) 薬剤防除にあたっては令和元年度技術情報第5号(令和2年1月29日付け；ホームページ掲載)を参照。

## (2) 軟腐病

### ア 予報内容

(ア) 発生地域 奄美地域

(イ) 発生量 やや多

### イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：並

発生ほ場率25% (平年19%)：並  
強風による茎葉の折損が多い (+)

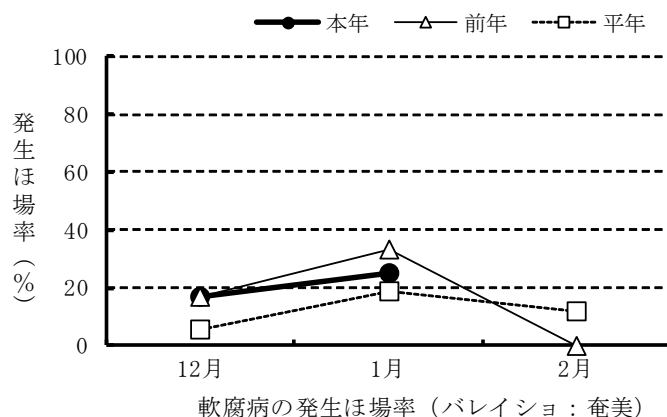
(イ) 気象予報

降水量：多い (+)

### ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 土中の病原細菌が茎葉，塊茎の傷口から侵入する。風傷み等付傷があり，高温多湿条件が続く場合は発病に注意し，早期防除に努める。前年に発生したほ場では特に注意する。

(イ) 収穫終了後の残渣は適正に処分する。特にくずイモ等の発病残渣をほ場に残さない。



## 防除に関する今月の留意事項

### 1. 収穫終了後の残渣処理について

露地野菜等の残渣は，菌核病や軟腐病等，次作での様々な病害虫の伝染源(発生源)となるので，長期間放置してほ場の病原菌密度や虫数を増加させないように，収穫終了後は速やかに残渣処理を行う。

(1) 収穫後の残渣はほ場外に持ち出し，適切に処分する。

(2) ほ場外への持ち出しが困難なほ場では，速やかに耕耘し，その後も複数回耕耘することで分解を促す。

## II. 花き（キク）

### (1) ハダニ類

#### ア 予報内容

(ア) 発生地域 県本土（施設）

(イ) 発生量

県本土（施設） 並

#### イ 予報の根拠

<県本土（施設）>

(ア) 調査結果 発生量：並

発生ほ場率30%（平年28%）：並

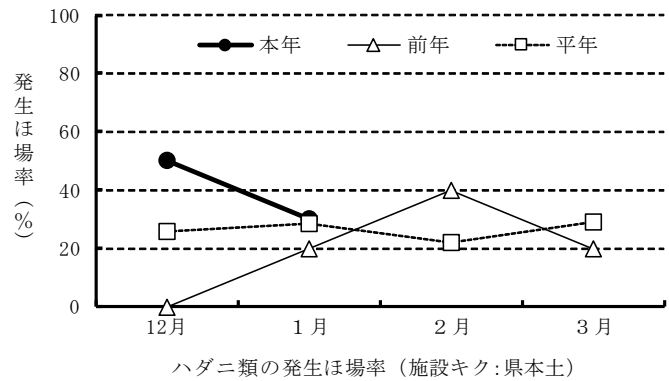
#### ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 出入口や前作での発生場所近く等でスポット状に発生するケースが多いので、ほ場全体をよく見回り、早期発見と早期防除に努める。

(イ) 薬剤は葉裏までよくかかるように散布する。

(ウ) 同一系統薬剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤のローテーション散布を行う。

(エ) ほ場内と周辺の雑草や収穫後の残さ等は早めに除去し、適正に処分する。



### (2) アザミウマ類

#### ア 予報内容

(ア) 発生地域 県本土（施設）

(イ) 発生量

県本土（施設） 並

#### イ 予報の根拠

<県本土（施設）>

(ア) 調査結果 発生量：並

発生ほ場率40%（平年23%）

：やや多（+）

発生程度は低い（-）

#### ウ 防除上注意すべき事項

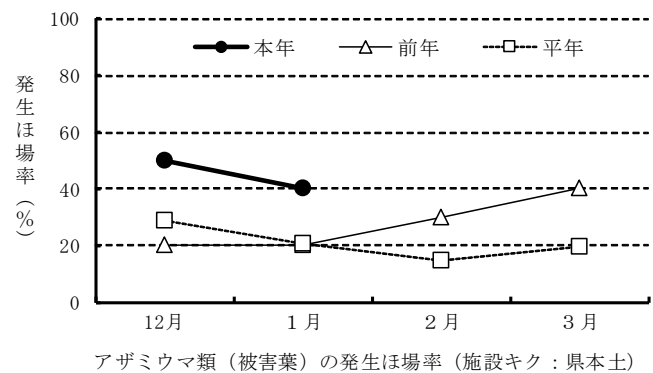
(ア) ミカンキイロアザミウマ等一部のアザミウマ類はキクえそ病（TSWV）とキク茎えそ病（CSNV）を媒介するので、ほ場への侵入防止と早期発見及び早期防除に努める。

(イ) 発生動向を把握するためには、出入口付近等に青色粘着シートを設置する。

(ウ) アザミウマ類は、種によって薬剤に対する感受性が異なるので、薬剤の選定に注意する。

(エ) 同一系統薬剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤のローテーション散布を行う。

(オ) ミカンキイロアザミウマは上位葉に、クロゲハナアザミウマは中下位葉に寄生しているため、薬剤は株全体にかかるよう丁寧に散布する。



## 農薬の適正使用について

農薬は以下の点に注意して適正に使用しましょう。

1. 使用前にラベルや説明書をよく読む。  
決められた対象作物・使用時期・回数・使用濃度等を守り、記載された用途、方法以外では使用しない。
2. 使用する農薬にあわせて、適切な防除衣、保護具（マスク・手袋など）を着用する。
3. 散布前には防除器具の整備・点検をする。
4. 体調がすぐれないときは散布作業を避ける。
5. **散布時には薬剤がほ場の外に飛散したり、流出したりしないよう十分注意する。**
6. **クロルピクリン剤は、住宅地および畜舎に隣接するほ場や、無風の時、土壤が乾燥しているときは使用しない。注入後は直ちに穴をふさぎポリエチレンフィルム等で10日以上被覆する。**
7. ランネート剤は毒性が強いので、施設内や噴霧のこもりやすい場所では使用しない。
8. 使用期限の切れた農薬、不要になった農薬および使用済みの空容器は適正に処分する。
9. 農薬は食品と区別し、鍵をかけて保管する。
10. 農薬の散布記録をつけておく。

### 「予報の根拠」の記載方法

- 調査結果の発生量は、前月の巡回及び定点調査による。
- 野菜類共通病害虫の発生量は、各作物での発生量やトラップ調査結果等を総合的に基づいた総合評価。
- 発生ほ場率と調査場所を記載しない発生数・発生率は、巡回調査の結果。
- 果樹と茶樹の定点防除園又は無防除園は、果樹部と茶業部での調査結果。
- 調査結果や気象予報等の末尾の（＋）、（－）は、発生量の増加、減少要因を示す。
- 気象予報は、向こう1か月の長期予報。
- 平年値は原則として過去10年間の平年を用い、本年調査値の後に（平年〇〇）で表記する。ただし、過去3年間の平均値を用いた場合は（過去3年〇〇）と表記する。